

GO

FLY



新北島中学校 学年通信 No44

2020.08.06. 発行



きょう、広島は75回目の「原爆の日」を迎えます。長崎は9日です。原爆の爆発後10秒間で、広島では14万人、長崎では7万人が一瞬にして亡くなりました。数十万人の死傷者を出した原爆の恐ろしさと平和の尊さを再確認する日であります。ところが、日本人の約70%がこの日を正確に答えられないというから驚きです。広島に原爆が投下された8月6日を正しく答えられた人は、全国で約30%、広島では69%、長崎では50%、長崎に原爆が投下された8月9日を正しく答えられた人は、全国で26%、広島で54%、長崎で59%と言う結果が出ています。

いっぽうで、原爆を直接体験した人は年を追うごとに減っています。この10年で9万人の被爆者が亡くなっています。原爆を体験した人の平均年齢は82歳と高齢化がすすんでいて、「やがて遺品しか残らない日が来る」とまでいわれています。

75年前の広島・長崎でいったい何があったのでしょうか。わたしたちはその体験を学び、語り継ぎ、平和な世界を築いていかなければなりません。絶対に風化させてはならないのです。社会科の授業では、広島での原爆体験者（被爆者）である沼田鈴子さんの話を録音音源で聴きました。この音源は、編集長が以前、広島の平和記念式典に参加したときに手に入れたものです。

沼田さんは21歳の時に広島で被爆されます。原爆投下の瞬間は、体験した人にしか表現できない強烈なものした。建物の下敷きになり、右足に大けがを負います。そして数日後にその足をひざから切断、もちろん麻酔もないなかの手術でした。片足を失って生きる希望を失った沼田さんに、さらに悲劇が追い打ちをかけます。それは・・・

あの運命ともなる1945年8月6日、午前8時15分。恐ろしいできごとが、広島市民の上に乗せまっていることなど、夢にも思わず、前夜からの連続的な空襲警報は、2時10分に解除となって、静かな朝をむかえていました。何事もなく無事でよかった、今日もがんばりましょうと思うと同時に、3日後にひかえた結婚式のことが心に重なり、はりきっていたわたしは、さっさと服装をととのえました。家族もすっかり支度が終わったあと、母が、「みんなつかれているので、今朝は、できるだけ涼しいうちに家を出る方がいいよ」といいましたので、そのつもりになっていたところに、サイレンがなりはじめました。

・・・・・・中略・・・・・・

1945年3月の末頃でしたが、待っていた婚約者が、8月8日、9日、10日の3日間のいずれかに戦場から、軍用で広島に帰るということを知り、両家の親達が、食べる物も、着る物もないけれど、顔をみた段階で結婚式をするということで、21才の娘として、夢と希望の喜びに胸をふくらませ、8月のくる日をどんなにか待ったことでしょうか。しかし待っていた婚約者は、7月にすでに戦死をしていたことを、知るよしもありませんでした。



the spirits of hiroshima より